

令和三年度 卒業証書授与式校長式辞

式辞

あれほど厳しかった冬も去り、いつの間にか春がやってきました。藤小のシンボルである桜の蕾みも赤みを帯び開花までもう少しです。この良き日、ご臨席いただいた保護者の皆様と共に、卒業証書授与式を行い、小学校の課程を修了した69名に卒業証書を手渡すことができました。卒業生の真っ直ぐにこちらを見る瞳の輝きの中に、一人一人の決意を確かに感じ、受け取ることができました。

皆さんが藤小で過ごした六年間は素晴らしいものだったと思います。楽しい授業はもとより、運動会や校外学習。部活動も頑張りました。特にこの2年間は「コロナ禍」での学校生活を余儀なくされ、「予防と学び」の両立を回ってきました。通常の授業に加え、6月より始まったクロームブックによる授業。みなさんはいち早く対応し「新しい学びの実践」をし、最高学年として学校をリードすることができました。十月に行った運動会や初冬の日光への修学旅行、本当に楽しかったですね。

そんなみなさんへのはなむけの言葉を送りま
す。今年度は知つての通り東京オリンピックや北
京での冬季オリンピックの年でした。北京の冬季
パラリンピックは先日、閉会式を迎えたばかりで
す。「パラリンピック」と造語ですが、何かしら
のハンデを持った人たちが競い合うスポーツの祭
典です。最初は戦争で傷ついた兵士の機能回復の
目的から始まったそうです。「失った機能を数え
るな、残った機能を最大限に活かせ」これはパラ
リンピックの父、イギリスの医師であるルートヴ
イヒ・グットマンの言葉です。失ってしまった機
能を回復するために、リハビリを行うことはよく
知られています。このリハビリをスポーツに変え
ることは、麻痺からの回復だけでなく「パラレル」
すなわちもうひとつの別な世界へと自分を変えて
いくことを意味します。「失った機能を数えるな、
残った機能を最大限に活かせ」パラリンピックで
活躍するアスリートたちを見ていると、今ある最
大限の機能と力を使って、自分の限界に挑戦して
いる姿は、それが圧倒的な説得力を持って迫っ
てきます。

世の中に完全な人間などいません。多かれ少な

かれ、苦手なものや、ハンデ。そしてコンプレックスを持っていてるものです。もちろん私にもあります。また、与えられたものも平等ではありません。それにくよくよ悩むよりも、それを自分に向いたものに変え、好きなものにしていくことができれば、どんなに素晴らしいことでしょう。そして、これからむかえる中学校時代は思春期の時期にさしかかります。身体の変化や気持ちのあり方で、すでにそれを迎えている人いるかもしれない。落ち着かなかったり不安に感じている人もいます。落ら着かなかったり不安に感じている人もいます。しかし思春期は背が伸び、体重が増え、体力が付き、気力が充実してきます。チャレンジ精神や学習能力がおおいに高り、リスクを恐れずに新しい世界を知りたいという気持ちが高まる時期です。内からわき上がるようなパワーを体感するでしょう。だから自分をコントロールできず、イラつくこともむしろ当たり前と言ってもいいかもしれません。ある説によるとヒトの古い祖先である南の猿人（アウストラロピテクス）がサルとはちがいで、暖かいアフリカの地を離れ、まだ厳しい氷期の続く寒い、世界各地に出て行ったのは、まさしく思春期のパワーがあったためだと

言われています。これから思春期を迎えるみなさんはそのパワーでたくさんの事に挑戦してください。そして失敗や挫折を経験したら、ちよつと休んでまたと自分を磨く努力を続けて下さい。

さて保護者の皆様、本日はお子様のご卒業おめでとうございます。「コロナ禍」でお子様の成長する姿を思うようにお見せすることができませんでしたが、動画や映像の中でもお伝えしてきたように、子どもたちは確実に成長しました。こんな時代だからこそ、安全や平和、人の命の大切さ、国際理解や国際協力について肌で感じ、より深く考えてくれると思います。それでも、時には壁にぶつかり、悩み、心揺れることもあるでしょう。多感な時期を迎えるお子様の心を受け止め、優しさで厳しさを持って、温かく見守って行って下さい。藤心小学校はもうすぐ五十歳。ぼうけん山の豊かな緑と花々に囲まれた母校はこれからもあなたたちを見守り続けます。藤小を巣立つ六十九名に幸多かれことを祈念して、式辞といたします。

令和四年三月一六日

柏市立藤心小学校長 成島 敏恭